

【書評】

坂口周著『「世界」文学論序説——日本近現代の文学的変容』

山田 栄官

(一橋大学大学院言語社会研究科修了)

本書は、坂口周著『意志薄弱の文学史——日本現代文学の起源』(慶應義塾大学出版会、2016年)以来の著者による研究書であり、著者が新しい世界文学論を主張するうえでの「序説」の位置づけにあたる著作である。2000年代以降しばしば登場し議論されるようになった世界文学論の言説においては、地理的な実在空間における歴史情報が埋め込まれた世界地図の拡がりという意味で「世界」概念が捉えられてきた。しかし、そもそも世界文学という概念の祖であるゲーテが把握していた「世界」概念は、世界を主観的もしくは美的に包摂する観念的な性質を帯びた概念であり、実際に世界文学は地理学的であると同時に観念的でもあるという両義性を備えた概念として現在に至るまで発展を遂げてきた。

著者は、まず本書を記すにあたって、近年の世界文学論において扱われている「世界」概念は、基本的には世界規模の外的拡がりとしての「世界」を念頭に記述されており、近年の世界文学論は、両義的な「世界」のずれを問いの対象にするという、人文学的な困難に正面から向き合っていなかったという問題の背景を述べている。これまでの世界文学論が、文学という領野が射程に入れる対象のなかで最も重要といえる、心的な「世界」を一緒に問題として方法論的に深化させる可能性を逃してきたという背景を踏まえて、本来であれば世界文学論が扱うはずの内的な「世界」概念に基づいて、文学のグローバルな動向とテキストの内的な「世界」の組成との関係を模索し、その関係性の変化に注目することで文学の歴史と役割を見直そうとする試みが本書のなかで行われている。本書において著者は、テキストのなかの「世界」(語りの主観的世界)に関する考察を世界文学論の中心的な位置に引き戻し活性化すること、及び世界文学それ自体の理解を更新し他ジャンルの発展との領域横断的な関係を描き出すことを企図している。以下において、本書の要点を章ごとに紹介する。

第一章「「世界」文学試論——貧乏的世界文学の系譜と村上春樹」では、「世界」文学論の方法に則った具体的な例を示すことにより、本書のコンセプトの理解を促すことを狙いとする記述が展開されている。「写生文」に始まって大正期に全盛となった、ハイデガーが定義するところの「貧乏的世界」像を題材とした創作を試みる態度が「純文学」の本流を形成したという日本近現代文学の系譜が、結果的に村上春樹(以下、村上)ら現代作家にまで継承されていく流れが示されている。生物学者のヤーコプ・フォン・ユクスキュルが『動物の環境と内的世界』(1909年)、『生物から見た世界』(1934年)などの著作において精緻に理論化した「環世界」(ある主体が主観的に作り上げた環境世界)という概念を援用しつつ、日本近現代文学の系譜が、ひいては村上の作品のような「世界文学」の登場というかたちで結実していく流れが示されており、「環世界」的な「貧しさ」を無

意識的に求める文学の系譜が論じられている。

第二章「「世界」表象の歴史と近代小説の形式」では、19世紀に発生した、第二次産業革命の飛躍的な技術革新による資本主義経済の急速な浸透と連動して、近代小説が「世界」を意識していく必然的な過程を、思想史的かつシステム論的に考察した過程が示されている。「セカイ」系の流通が開始された2000年代から遡って、その源流を文学の領野に探るにあたっては、村上の作品に代表される1980年代の小説群が最初に参照されうるものであり、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』において示されている、ひとりの人間のなかに閉じた「世界」のありようは、当時の「世界」認識のされ方を正確に反映したものである。鶴見俊輔の論考「ドグラ・マグラの世界」(『思想の科学』、1962年)において、日本における「世界小説」の「起源」として夢野久作『ドグラ・マグラ』(1935年)が捉えられていたように、そもそも「世界」概念はこの『ドグラ・マグラ』が登場した1930年代に、それ以前から進行していた「世界」意識の拡大と変容の結果として生まれたものである。このように現在の「世界」認識のルーツを通史的に探究するうえで、本章において著者は、「世界文学」が一般語として誕生し流布していく契機となったゲーテの指摘に加えて、カント由来の超越論哲学などのドイツ語圏の近代思想において用いられていた「世界」という語の重要性を説明するとともに、そうした「世界」概念が19世紀末に日本近代文学の中核へと流れ込んでいく展開まで遡及的に概観している。ほかには、1891年半ばから約1年間にわたって、森鷗外と坪内逍遙のあいだで繰り広げられた「没理想論争」の内実が具体的に例示されており、近代の日本文学が「世界」概念の体系に本格的に参与していく展開が説明されている。

第三章「近代文学の現象学的転回」は、第二章で示されている内容を引き継ぎ、議論の焦点を「女」の表象に据えつつ、比較文学と世界文学論の方法論的な差異と調停の可能性を検討している章である。ゲーテが唱えた「世界文学」の言葉が日本に浸透し始めた19世紀以降に、日本の小説が描こうとする「世界」の組成が大きな転回を遂げたこと、またそれに伴って「語り」のスタイルが、西洋中心主義的な世界の拡がりへの反発と従順のせめぎ合いのラインを辿りながら多様に変遷していったことが示されている。西洋の写実主義が環境に置かれた人物を内面と外面の両面(相互作用)から記述し、それを説明的な上位の〈語り〉によって解釈学的に「理解」する視線を共有するものである一方で、日本文学は「私」が出会う一過的な現象世界を「自我」の内側からのみ記述する方法を採用しており、著者はこの方法を「現象学的転回」と定義している。本章においては、「現象学的転回」以後の「私」化された「世界」のなかに異物として出現する「他者」としての女をいかに表象すべきか、という課題に取り組みされた系譜に焦点を絞り、森鷗外『舞姫』や夏目漱石『明暗』などに加えて、有島武郎や志賀直哉、武者小路実篤ら白樺派の作家による作品を例示しつつ、容易に「世界」に組み入れられないが、しかし「世界」の形成の決定的な要素として現れる「他者」の位置に相当するものとして「女」の表象の課題を取り上げている。最後に、明治大正期における表象困難な「女」の他者性の問題を整理することで、近代小説の語りの特質においては、その内面意識と外面行為とのズレを生む〈他者〉の両義的な揺らぎの扱いが最大の課題となることから、近代文学の形成とその様式変遷において、「演技」という主題、ひいては演劇というジャンルを、いかに小説の理論のなかに接收するかという問題意識が重要な位置を占めていたと指摘する。

第四章「感情移入の機制——他なる「世界」に生きる〈演技〉」は、著者が本書を執筆するうえで最も時間と労力を割いたという章である。本書は、19世紀末頃から20世紀初頭の時期を、近代

日本における「世界」概念の形成と変容を捉えるための軸となる歴史的箇所として設定している。本章では、第二章・第三章で論じられた上記の時代的な範囲のなかで、「演技」とそれに付随する「感情移入美学」の理論的な問題が、近現代文芸の小説形式の展開において果たした役割の大きさを系譜学的に考察し、日露戦争後の「新自然主義」勃興期における理論的な転回を巡る議論の更新を図っている。〈経験的—超越論的二重体〉としての近代的主体性は19世紀末に分裂し、20世紀前半に何らかのかたちでの人間性の一元的回復が試みられた。新たな倫理的言説により近代的主体の「回復」を目指した、1920年から1960年代までの「世界再形成期」においては、引き裂かれた主体を引き裂かれたままに肯定するアイロニカルな主体をモデルとする考えが、多数の文学作品の思想的な基盤に据えられており、そうしたありようは「私小説演技論」(1950年前後)や「メタフィジック批評」(1955年)をもとに論じられている。第三章で定義された「現象学的転回」の重要な現れである、小説の構造における「感情移入美学」の実践的な現れは、1907年頃の「新自然主義」やその周辺の動向を待たずして遡ることができる指摘する。その証拠となるテキストとして、例えば、「自然」と同化および対比された「人々」が主題に据えられている、国木田独歩の「忘れぬ人々」(『国民之友』、1898年)を挙げ、「感情移入美学」を発動する際に「距離」を介在させることの必要性を強調しながら、「感情移入」の理論的な働きの重要性を説明している。「語り」の様式の背後に潜んでいる「感情移入」の理論的な働きの重要性が、実際には多数の近代作家のスタイルの選択を裏で決定づけてきたと捉え、「距離の感覚」の話題と関連して「解離」や「共感」の問題にも言及しつつ、「感情移入」の歴史的展開の行き着いた先として21世紀以降の現代文学までの変遷を述べている。

第五章「小説家としての正岡子規——先駆する「写生」」はいわば間奏的な章であり、第四章までの議論の補遺にあたる。俳人として名を馳せた正岡子規は小説家としては無名であったが、彼の書き残した数点の小説が、近代文学史の転回の多くの兆候を示していると指摘している。その数点の小説が、後続の作家に密かな影響力を発揮していた形跡をもとに、子規の小説のなかにモダニズム文学の萌芽を探り当てる試みがなされている。

第六章「現代文学と〈想像力〉の問題——村上春樹の場合」では、戦後のフランス実存主義を牽引した哲学者サルトルから大江健三郎(以下、大江)、そして村上へと引き継がれていった「想像力」の問題を重要視する文学観が、近代主義的な文学観と比べてどのような構造的変化を遂げたのか論じられている。また、「想像力」の問題を巡る構造的変化を踏まえ、最終的に1980年代に至って「想像力」がその価値を急激に低下させたことが、いかに新時代の文学の主題となっていったか、大江と村上を対比的に捉えつつ論じている。具体的には、大江は「想像力」が自立した力をもって現実に拮抗して作用すると考えている一方、村上は「想像力」の機能が既に半壊しているために、想像的な世界の維持に必要な境界線が無化しつつある状態としてしか「世界」の表象を考えていないと指摘されている。また、大江は歴史を空無化し、その空無の内容を構造化することを意識していた一方、村上は無根拠性に向き合っていると指摘されている。加えて、身体性のリアリティを巡っては、大江は肉体的暴力、死体、性欲などを露骨に表現するにもかかわらず観念的な印象を免れない作家である一方、村上『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の地下の暗闇を這いずり回る描写などのように、読者が追体験できる感覚を意識的に表現する作家であるとし、村上作品に身体的な共感作用を見出している。これらの対比をもとに、1980年代から20世

紀末にかけて「世界」が消滅していく過程において、現代文学が抱えた新たな課題と、その困難の具体性を示している。

終章「「世界」の消滅のあとさき——〈経験的—計算論的二重体〉の時代」では、第一章から第六章までの内容を要約しつつ、18世紀後半から19世紀末までを「世界形成期」、19世紀末から1920年代末までを「世界分裂期」、1920年代から1960年代頃までを「世界再形成期」、1970年から20世紀末までを「世界消滅期」と区分し整理している。これらのうち「世界消滅期」後の「世界」を示すうえで、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の執筆を通して「世界」の回復と文学の復権のこだわりを一時的に放棄したことが村上の最大の貢献であると捉えつつ、このような村上作品の比較対象として、1980年代に決定的な勢いで娯楽市場を席捲し始めたビデオゲームという文学以外の表現ジャンルを挙げ、多角的な視点をもとに議論の方向性を広げている。「世界分裂期」以後に、〈経験的—超越論的二重体〉（ミシェル・フーコーの発想に倣った19世紀の新しい人間像）、〈経験（存在）的—存在論的二重体〉（ハイデガーの登場からサルトルへと続く存在論哲学の流行に基づいた、1930年から1960年代に模索された新しい人間像）、〈経験的—計算論的二重体〉（1980年代以降の近代的な「世界」消滅以後の人間のイメージ）へと次第に変化を遂げていることが示されている。これらはすべて二重体である限りにおいて両義的な存在であり、文学的な営為として計算論的な不可視の領域も含めた思考困難なものを意識過剰に書き起こし、存在論的な差異化（二重化）によって主体の「自由」の確保を継続することをもって、人間的「世界」はかたちを柔軟に変えて回帰し、新たな美学によって肯定されると結ばれている。

最後に、本書の村上作品の読解のなかで、稿者が特に関心を抱いたことを要約し紹介したい。著者は、村上作品の特徴として、「世界」の貧乏性を日本語文学の伝統としてテキストの中核に組み込みつつ、時代の文学への更新の模索の起点となった点を挙げている。また、テキストにおける物語の展開を通じて「世界」の可変的な生長や混線、そして消滅を描くことに、村上は極めて意識的な作家であると述べている。本書において、村上作品の具体的な場面が度々例示されているなかで、第一章における短編「眠り」（『文學界』所収、1989年）の読解においては、主人公の女性が深刻な不眠に陥ったという危機的な事態が「ただ単に眠れない」だけのクリアな覚醒状態と表現されている点に着目し、安全な家事の反復という環世界的な閉鎖世界から、真にリアルな世界へと「覚醒」する話であると、「世界」規模に論点を拡大して捉えられている。剥き出しで環世界の外部を覗いた際に、覚醒したはずの自我がリアルな「無」の現前の強度に耐えることができず、存在論的な動揺を引き起こしていると捉え、最後の場面で女性が得た悟りには、主人公の女性が読書体験を通して得た悟り以上の重い意味合いがあると指摘している。

同じく第一章における、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（2013年）の読解においては、高校時代に多崎つくると完璧な調和で維持されたグループを形成していた4人の親友たちは、みな名前に色をもち動物界に属している存在である一方、多崎つくるとは環世界的な調和を破壊した存在であると指摘されている。そして、高校時代の親友のひとりであるシロのことを〈世界が突如恐怖に満ちた場所に変貌する可能性〉を開示してしまう象徴、恋人の沙羅のことを多崎つくるとが巡礼を経て解脱（悟り）の道に至る契機としての意味をもつ存在と読解し、シロと沙羅の両者を彼にとって分身的かつ対照的な意味をもつ存在として捉えている。死んでしまったシロ以外の全員を訪問し、多崎つくるとが絶交を申し渡されるに至った原因を明らかにする巡礼を終えた後、彼が沙

羅の元に戻って、彼女との新しい共同的な「世界」の形成に参加する決意を果たしているところに、彼が自身の人間性を回復していく今後の展望が示されていると指摘されている。

さらに第六章において展開されている、短編「象の消滅」(『文學界』所収、1985年)などの作品において登場する「象」に託された意味の考察にも関心を抱いた。生きている象を生きた「想像力」の寓意と読解することを通して、「象の消滅」において象が「消滅」する事態を、「想像力」が世界的あるいは同時代的に失調する事態であると捉えている。そのうえで、村上は彼の初期作品において、想像力という「図式機能」が、現代社会ではグローバル資本に搾取されている、機能失調する、暴走を起こすありようを描いていると指摘されている。「象の消滅」などの作品に見られる「象工場」という言葉は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』にも登場していると指摘し、この作品を「象の消滅」すなわち「想像力」の失調の物語として、主人公の「私」を「想像力」が壊滅的危機に直面している存在として捉えている。

また、「かえるくん、東京を救う」(『新潮』、1999年)は、複数の「世界文学」的作品や発言からの直接的・間接的な引用や要約のインターテクスチュアリティとして成立している作品である。読者の手元にそれらの定訳がありつつも、あえて「想像力」を介した引用を行っている点に、生まれながらに脱国語文学的な「世界」性の体现を目指す、新時代の「世界文学」テキストとしての意味を見いだすことができると指摘されている。「想像力」が失調している状況のなかでも、村上は消滅していたはずの「想像力」を再生し立ち上げていくという課題に執筆を通して果敢に立ち向かっていると指摘されている。このような村上の問題意識が、最新の長編作品『街とその不確かな壁』や最新の連作短編「夏帆」シリーズといった、彼の最近の執筆活動に至るまでどのような影響を与えているのか、そしてその問題意識はいかなる変遷を遂げているのか。本書をもとに「世界」概念の由来を通史的に遡って把握し、文学の問題系が射程に入れる領域を過去へと広げることが、村上作品のなかで中心的に扱われている「想像力」の問題が文学史上どのような位置を占める問題であるのかという相対的な視点をもって現代の状況を考察するための広範な視座を獲得することにつながるだろう。